427　学生　上野紗弥子氏

河川レンジャーとは、淀川水系河川整備計画策定に向けての説明資料第２稿によると、「地域固有の情報や知識に精通した住民団体や地域に密着した組織などから河川関係（河川法、河川環境など）の基礎知識を有するものを河川レンジャーとする。

河川レンジャーは河川に関わる文化活動、自然保護活動を助言し、河川管理行為を支援する。」とある。

管理者は河川レンジャーを取り上げることで、住民、地域に密着した組織などとパートナーシップを築いていき、そして、河川に係わる人材の育成の支援、地域住民と連帯して環境教育を推進すること、子ども達が安全に楽しく遊ぶための川の指導者育成の支援を推進するとしている。

子ども達は指導者がいないと川で遊べないのだろうか。第二稿だけでは意味がよく分からないのは河川レンジャーとは何なのかまだ話し合われている段階だからのようだ。

説明資料から受けた印象では、河川レンジャーは河川法の理解、住民、役所とスムーズに渡り合っていかなければならないなど、専門家並の知識や経験が要求されている。

河川法の理解が基準ならば、河川レンジャーになれる人は少ししかいない。少ししかいないのでは、今までとあまり大差ないような気がする。

地域固有の情報や知識に精通した住民団体や地域に密着した組織はそれなりにあるが、河川法を基礎知識として持っている住民団体はそんなに多くないのではないか。基礎知識とはどれほどのことをさして、ある、とするのか。また、レンジャー候補としてセミナーを受ければ得られる程度の物なのだろうか。

そもそも地域固有の情報や知識に精通した住民団体や地域に密着した組織に普段の生活の中であまり関係ない河川法なんて、そんな難しいこと必要だろうか。河川レンジャーを通して関わる役人が把握していれば十分ではないか。

地域に密着して活動するおじさんおばさん組織が、地域にどのくらい根ざしているかということと河川法をどれだけ理解しているかなんてことは比例しないと思う。なので、河川法の知識を基準に持ってくることはそぐわないのではないか。また、河川法は河川敷の中の法律なので地域に密着した組織にあまり浸透するとは思えない。

私は有識者やＮＧＯ．ＮＰＯに限らず、河川の変化と共に生きてきた住民が住民のためにフィールドに出て活動する人すべてが河川レンジャーでいいと思う。

環境に関するレンジャーとは自然保護官という意味なのだそうだが、「河川レンジャー」なんてインパクトのあるネーミングを知ったときは、思わず子供のテレビ番組にある戦隊ものを想像してしまった。私が考える気安い河川レンジャー像は、そのほうが私の世代的には親しみが持てる。

河川レンジャーをたくさんつくってみてはどうだろうか。

そこで私なりにまじめに次のようなことを考えてみた。親しみやすい戦隊もののレンジャーと河川レンジャーをかけてみた。戦隊ものの隊員は大抵５色で五人であるから、５色の５グループで役割分担をしてみた。

戦隊ものの主人公であるレッドの長老レンジャーは、地域で活動している自分と関わる以外の団体と積極的に情報交換するなど、河川ばかりにこだわらないで、地域で理解し合うコンセンサスきっかけになる役割。住民の中で意見が割れたときに話し合う場をつくる。（判断参加）など調停役的な役割を担う。

ブルーレンジャーは学術的なフォローをする役割を担う人。ここには専門家を迎えたら良いと思う。

グリーンレンジャーは河川法などの知識はないが地域の河川には詳しく、地域で活動し

ている人を繋ぐ役割。流域モニターなど持続的に川を見続け、動いていける、おたくな人々（情報参加）。

ピンクレンジャーは特に専門的な知識はないが、地域河川美化や観察などに関心が高い人。きっかけが有れば積極的に関わって手伝う気がある人。自分なりの理想をもって取り組める人。主婦層や退職などして時間がある人。主婦の突っ込みは侮れない。主婦は融通が利いて目的のためには些細な問題を跳ね飛ばし、目標を達成していく発想と柔軟さを持っているのである。

最後のレンジャーは小中学生、高校生たち子供のイエローレンジャー部隊というのはどうだろうか。

自分たちなりに思うところあるが、地域の活動には保護者、学校関係者がいないと加わりにくいもの。その地域をずっと見てきた人の話などは学校では聞くことが出来ない。子どもが子供専用の活動をするのではなく、こどもも受け入れられるようなグループ活動であってほしい。

整備計画の河川レンジャーの理想には及ばない準河川レンジャーだが、年齢を問わず参加しやすい活動をするには、地域の人にその存在を知ってもらい、関わってもらうためにはどんどんアイディアを解き放っていくべきだ。実際、時間の余裕をもって活動出来る人たちは小中高大学生世代と退職者や子育ての終わった世代が圧倒的だと思う。地域の取り組む問題によっては直接河川に関係ないかもしれない。

専門的な知識がある、なしでやる気をはかれるのだろうか。専門的な知識を得る入り口になること、そして参加する市民が気易く意見を述べられることがレンジャーの魅力であると思う。限られた人にだけレンジャーになる資格があるのではなく、持続的に地域で活動する人全体をレンジャーと呼んでもいいのではないだろうか。

仮でも一応レンジャーの方が共有意識を持てそうだし、自治体と取り組むことで地域にあった付加価値がついて行けば地域にとっても魅力的だと思う。

河川レンジャーは行政に河川の美化、清掃、をやらせてもらっているのではなく、コーディネーターでもなく、とにかく河川の環境のために取り組んでいこう、どうなるかはやらないと分からないが臨機応変にやってみようと新しい感覚で動きだす地域の起爆剤になるかもしれないと期待する。